

2018年度 宮古・福島

村本邦子（立命館大学）

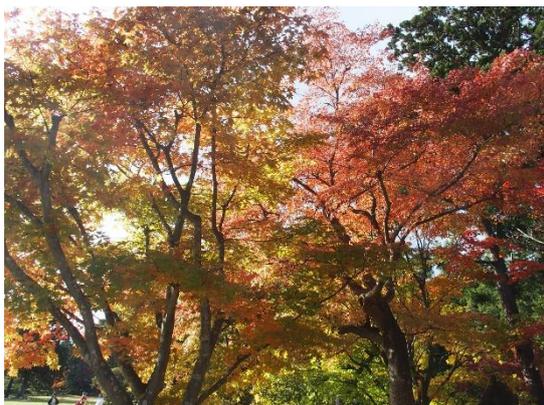
春が来て、夏が来て、冬が来た。コロナ禍は続く。緊急事態宣言下、毎日、大阪の街を歩き回った。あちこちに記念碑やお地蔵さんを発見し、あらためて大阪の歴史に思いを馳せた。天神橋筋商店街は賑わっていて、シャッターをおろした店の前に出店が並んでいた。ふと見れば、向かいには、天神祭りの神輿と大きな厄病払いのお札が置かれている。大阪商人のしたたかさと逞しさに思わず笑いがこぼれた。東北に通うようになって、「土地の力」というものを感じ、考えてきたが、大阪の「土地の力」を実感する契機となった。それからいろいろ調べ始めた。

中沢新一の『大阪アースダイバー』（講談社）によれば、大阪は、上町台地の突端に建てられた難波の宮（7世紀）から南に伸びる難波大道に沿った「アポロン軸（王の生命力）」と、上町台地から見て東の生駒山を眺める軸線「ディオニュソス軸（野生の文化）」のふたつによって、ものの見方、考え方が作られているところに特徴がある。地質学、歴史学に添ったこの視点は、かなり興味深く、納得するところが多かった。

たとえば、大阪は、疫病に対して、天神祭りや赤い人形など疫病払いの呪いによって対処してきた歴史と、緒方洪庵の適塾や除痘館など科学によって立ち向かってきた歴史がある。夏は、狙いを定めてこれらの施設を見て回った。「病の語り」という観点から考えてみても面白いに違いない。



プライベートに秋の岩手を楽しんだ後、プロジェクトメンバーと合流。今年は、魚菜市場とイーストピアみやこの2会場で漫画展を開催、11月3日にプログラムを実施した。



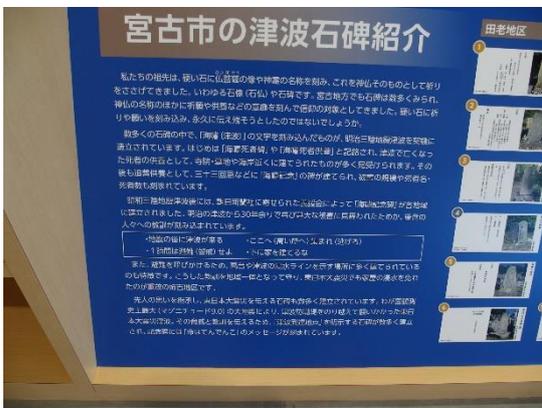
イーストピアみやこ市民交流会館は、10月1日、JRと三陸鉄道の宮古駅の裏手にオープンしたばかりの新しい施設で、本庁舎と保健センターが一緒になっている。全館に光が入り、街を眺望できるガラス張りのつくり、地元の木材を使ったテーブルや椅子など暖かく親しみやすい空間となっていた。漫画パネルの展示も美しく映え、多くの方の目に触れたのではないかと嬉しい。もちろん魚菜市场には魚菜市场ならではの味わいがある。

1階にある防災プラザには「震災と津波のコーナー」があり、過去の災害の歴史展示、東日本大震災と復興についての展示とともに、映像など充実した資料が揃えてあった。

「つなみ」と題する紙芝居は、田老の女性による20年ほど前の手作り、昭和三陸大津波の体験を描いたものである。津波石の紹介も面白かった。もともと石仏や石碑は信仰の対象で、硬い石に祈りや願いを刻み込み、永久に残そうとするものだった。明治の三陸大津波より「海嘯（津波）」を刻み込んだものが造られるようになり、死者の供養として被害規模や死者名などが記された。昭和の大津波後は、明治の大津波から30年後に甚大な被害を出したためか、後世への教訓を含むものとなった。

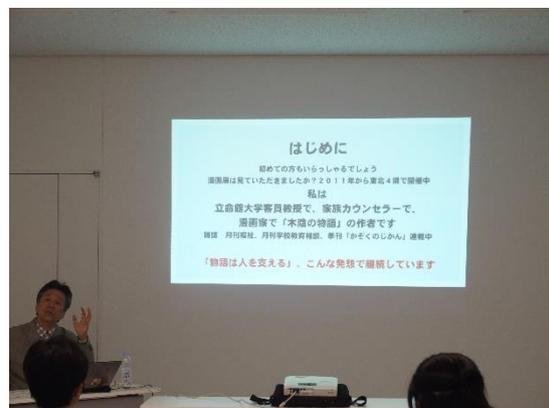
その教訓とは、「地震の後には津波がくる」「ここ（高い所）へ集まれ（逃げろ）」「1時間は避難（警戒）せよ」「下に家を建てるな」というものである。今またここに展示することで、これを後世に伝えようとしていると言える。





3日は朝9時集合で、すきっぷのスタッフの皆さんとミーティング、10時から団士郎「漫画トーク」を開催した。

アンケートには、「昭和7年洪水、戦前、戦後、平成と生きてきて、子どもの頃の苦しい生活を思い出し、感動しました」（70代以上、男性）、「10年、もう終わりなのですね。それ以降はないのかな？とはいえ、私も宮古を出てしまったので・・・。1年に1度、お話を伺えることを楽しみにしています。また来年お会いできますように」（50代女性）、「最初に宮古にいらした時よりお話を聞かせて頂いています。いつもありがとうございます」（60代女性）など、それぞれに喜んでいただけたようだ。





昼食と午後の打ち合わせを挟み、13時からの「アートで遊ぼう」は、いつものように若竹会のリードで工作や塗り絵を楽しんだ。





14時からは「ふるさとの歌や物語を楽しもう」、NPO 法人輝きの和による絵本と紙芝居、鶴野さんによる伝承手遊び。紙芝居は、宮沢賢治の作品と、昨年も披露してもらった宮古の民話「しろこ地蔵」で、尾林星さんの手作りである。暖かく心地よい空間で、小さい子どもからお年寄りまでが一緒になって、楽しいひと時を過ごした。今年は院生に留学生もいたことから、英語や中国語バージョンも取り入れ、国際色豊かな手遊びとなった。

「人見知りの子どもたちの対応大変だったと思います。子どもたちは、『とてもうれしかった』と話しております。楽しい時間をありがとうございました」(30代女性)などの声を頂いた。





支援者支援セミナーでは、今年も地元の支援者に事例を提供してもらい、「家族造形法」で事例検討を行ったが、登場人物が多かったので、いつもより多くの方々に身体を使って考えるという体験をしてもらえたと思う。



毎年参加してくださっているみなさんの声に、十年のプロジェクト終了後をどのようにつないでいけるのか考えさせられる。

齊藤清志さんのお話

プログラム終了後は、田老地区の出身で、現在は市役所の企画部復興推進課に務めておられる齊藤清志さんのお話をお聴きする機会を得た。

齊藤さんは、震災当時、宮古の内陸部にある給食センターに勤めており、地震後、まったく情報が得られないまま、「どうやら津波がきたらしい」との話に、眠れないまま一夜を過ごしたという。

翌日、家族は車で逃げて全員無事だったことがわかった。実は2日前に大きな地震があつて、いざという時のことを話していた。家族は車を乗り捨てて山に駆け上つたが、車は流されてペしゃんこになった。

震災遺構となった田老観光ホテルの近くにあつた自宅にようやく行けたのは十日後だったが、防潮堤が決壊して、がれきもすべて流され、何もかもなくなり、あさりやウニがいっぱいころがっていた。一家全滅

だった方もあり、家は流されてもみんな無事でよかったと思った。

それから、グリーンピアでの避難所生活が始まったが、当初は間仕切りもなく、毛布一枚配られただけだった。避難所生活は3か月続き、周囲が次々と仮設住宅に引っ越すなか、市の職員であることから避難所に残るよう言われた。家族は「しょうがねえんじゃないか」と言ったが、さすがに精神的にきつかった。その後、仮設住宅をキャンセルした人がいて2011年6月に仮設住宅に入ることができた。

5年半そこで生活した。隣は壁一枚、5人家族で大変だった。現在は、新しく造成されたエリアに家を建てて住んでいる。元住んでいた場所は災害危険地域に指定されたので、新しい場所を見つけなければならなかった。その辺りは、もともと家を建てるなどと言われたところだったが、三陸鉄道のトンネルを掘った碎石で埋め立てられ、防潮堤もでき、海も直接見えず、大丈夫だろうと、昭和50年頃から家が建ち始めた。子どもの多い時代で、家族も核家族化し、三世同居は減ってきていた。

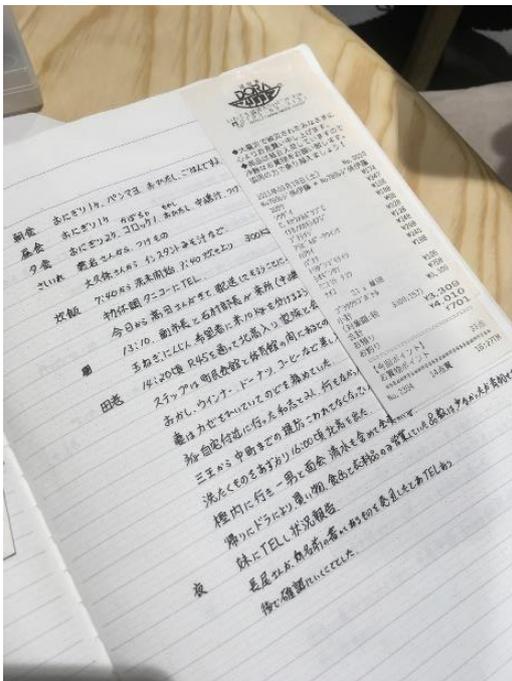
選択肢として、市から出るというものもあったが、市役所に勤めながら市から出るというのはあり得ないので、結局新たに造成された高台にした。一番低くて標高40m、自分のところは60m。場所決めはドラフト制だった。これも市役所勤めということで気を遣ったが、誰とも希望が重ならず良かった。

移動商店、生協の配達もあり、ようやく団地らしくなって、近所からワカメやなんかが届くようになった。戻ってきたなど感じる。公共施設を集約しているので、警察、

保育所、消防署、だいたいのもがある。168のうち8区画残っている。一戸建てだが、公営住宅のゾーンもあり、戸建てタイプの公営住宅もある。高齢者の夫婦でも、孫たちを招くために、また、子どもたちにとって故郷がないのはと、戸建てを選ぶ。再建支援補助金が出ているが、復興事業にもっていかれて資材は震災前の倍に跳ね上がった。

震災直後、パソコンもなく、全部手書きで記録を残したというノートを見せて頂いた。震災2日後に、これは覚えていられないなど記録をつけ始めた。8日に初めて電気が戻ってレシートが出るようになったのがわかる。同僚からもらった食料とか衣料。震災の夜はおにぎりひとつだけだったが、翌日は、近所の方々が炊飯器で炊いたものを持ってきてくれた。

自分自身は、給食センターで翌日電気が通ったので、一ヶ月炊き出しをして、避難所に配った。食べ物だけは豊富にあり、みんなよくしてくれた。グリーンピアに入ってから自衛隊が炊き出しをしたので、食料には困らなかった。ただ、支援物資には小物が少ない。上着や下着はくるが、靴下やハンカチがこない。全部流されているから、困った。



地域の子もたちの状態としては、当時は中学1年生がおかしくなった。学校が被災したので小学校を借りて半年いた。そうすると、中学生が子どもに戻った。とくに中1は小学生のようになってしまった。そんな年が1～2年あった。

避難の時、保育所の子を助けてくれた中学3年生は、おにぎりや燃料が来た時には、みんなに配って歩いた。避難所に行ってからちょっと荒れたこともあったが、やんちゃ系で元気がある学年だった。

津波のことを考えないことはないが、考えなくてもいい。家族はまだ海に行きたがらないし、船に乗らない。自分も以前はよく釣りに行ったものだが、今は釣りにも行かなくなった。

防潮堤については、海が見えなくなるとか言うが、もともとあったので、つきあって生活している。いざという時に守ってくれるもの。時間を稼ぐものだと考えている。海を見なければ見えるところにいったらいいと思う。

被災者であると同時に、公僕という立場からの貴重な体験と率直な気持ちを聞かせて頂いたが、つらい体験もユーモアを交えて語る姿、日誌の几帳面な記録などから包容力のある暖かいお人柄がにじみ出ていた。人間ってすごいもんだなあと改めて思う。

11月4日(日)田老学ぶ防災

朝9時にホテルを出発、9時半から11時、今年も田老の「学ぶ防災」に参加した。4回目となるが、今年も佐々木純子さんに案内をして頂く。いつも大歓迎して下さるので、私たちも「また帰ってきたんだなあ」と懐かしい気持ちになる。佐々木さんの語りは毎年変化していて、ガイドとして良いお仕事をされているのだと思う。お天気もよく、波も穏やか。第一防潮堤の上に立つと、海との間に第三防潮堤の工事が進められていた。田老観光ホテルに向かう途中で、川を遡上する鮭の大群を見た。初めて見る光景に皆興奮した。

田老観光ホテルの6階で、今年も津波の映像を観る。何度観ても、恐ろしさに息を

呑み、津波に吞まれてしまった人々のことを考えてしまう。とくに、今回は、この辺りに家のあった齋藤さんの被災体験を聞かせて頂いたので、より身近なものとして感じられた。



終了後、大槌へ向かい、浪板海岸の「さんずろ家」にて昼食。太平洋を一望しながら、蒸しウニ丼定食を食べた。千円弱、驚きの値段である。



大槌町語り部ツアー

12時半、大槌町旧庁舎遺構前で「語り部ツアー」のガイドと落ち合い、14時過ぎまで案内して頂いた。ガイドさんは、旧庁舎の近くにあった自宅を津波で流され、近くに新しい家を建てて暮らしておられる。町内会長をしているとのことで、あちこちで出会う人と言葉を交わしていた。

旧庁舎の解体について、老朽化のため震災前から取り壊しが計画されていた建物だったこともあり、解体に賛成ということだったが、防潮堤には反対で、住宅地をかさ上げしたり、住宅を高台移転させたりして海が見える住まいにすべきだと強調されていた。漁師が多い赤浜地区の住民はそうしているそうだ。

遠野・大平悦子さんの民話語り

大槌町から釜石を経由し、紅葉の美しい仙人峠のトンネルを抜けて遠野へと向かう。遠野の古民家で大平さんご夫婦に迎えてもらうのだ。パチパチと火が燃える囲炉裏端

で、手作りの遠野名物ケイランと庭で採れた果物を頂き、民話をたくさん聞かせて頂いた。

初めて大平さんの語りを聴いたのは2014年だったが、その声に耳を傾けると、不思議なほど物語の場面がいきいきと目の前に浮かぶ。おもしろい話、怖い話、考えさせられる話に感情を動かされ、最後はとても満ち足りた気持ちになる。そして、豊かさとはこういうものなのだと思う。院生たちにも何物にも代えがたい貴重な経験をさせる。毎年、暖かく迎え入れた頂けることに感謝する。



2018年12月福島

11月29日(木)原発情報センター

朝早く新幹線に乗り、白河に隣接するアウシュビッツ平和資料館と原発災害情報センターへ行く。

アウシュヴィッツ平和博物館館長の小淵真理さんが原発災害情報センターを案内してくださった。富岡町、双葉町の写真展示をやっており、原発を誘致してきた看板、原発事故が起こった後の混乱、絶望から自死を選んだ人の言葉等々の写真、除染作業着とフレコンバッグが展示されていた。展示物はまだ少ないが、手作り風の暖かい雰囲気、市民の思いを見るようだった。今後の発展を祈りたい。

コミュタン福島

それから三春町に足を延ばし、福島県環境創造センター交流棟（コミュタン福島）を訪れた。あまりに立派な建物で、ふたつのミュージアムのお金のかけ方の違いに絶句する。コミュタンはまるでテーマパークだ。環境創造シアターは、360度の3Dで、あたかも自分が立体映像空間の中に入り込めるような仕組みになっている。これを体験するだけでもここに来た価値がある。

とくに福島の美しい大自然は、観光で行ったとしてもなかなか見られないだろうと思われる姿をうまく映像で切り取っており、うっとりした。こんな美しい福島をこんな状態で沢山の課題を抱える、そんな原発に反対しますと結ぶのが自然だと思われたが、実際にはそうならない。

全体を通じて語られるナラティブは、放射線は宇宙創造とともにいつも私たちの身の回りにあり身近なものです、除染はこんなに効果をあげています、原発依存しない福島を目指していますという物語であり、子どもたちの感想の展示は、「楽しかった！」のオンパレードだった。

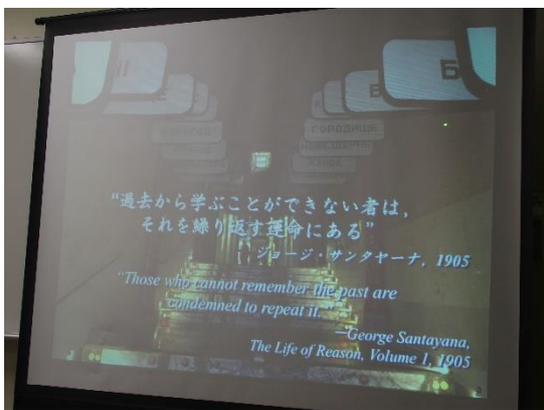
キーボードでメッセージを入れるとそのまま壁に文字が映し出される「未来へのメッセージ」と題する展示があり、驚いたことに検閲がかかっているようだった。「原発安全なの？」とメッセージすると「原発安全」と映しだされ、「怖い」も「不安」も消されてしまう。結果として、壁にはポジティブな言葉だけが並ぶ。しかもどこかでモニタリングしているのか、そうこうしているうちにスタッフ数人がざわざわと集まってくる、こちらを見ながらどこかに電話し

て指示を仰いでいるような様子に見えた。あまりの衝撃に度肝を抜かれ、怖くなって立ち去ってしまったのだけど、きちんと素直に「どうして書き込んだ文字が消されるんですか？」と説明を求め、回答があればそれに意見を言うという普通のことがどうしてできなかったのかと自分が情けなく落ち込んだ。ふだんからよくよく考えておかないと、人間は咄嗟の時に適切な行動ができず、自己効力感を落とすものだ。次の時にはそうしよう。



たちが楽しめる展示となっており、汚染の程度や被ばくによる人権侵害の状況について判断するために必要な情報が少ないということだった。

今の日本社会でこのテーマを研究し続けるのは、どれほど大変だろうと思う。それでも、「意見を言っても無視されることがほとんどだが、展示が変わったところもある」と前向きに地道な活動を続けておられた。「チェルノブイリミュージアムも時間をかけて展示を作ってきた」とのこと、是非見てみたいという気持ちが高まる。福島のことを思うと悲しくて悔しくて胸が締めつけられる。本当に残念な現実だ。過去に学ばないポジティヴィズムは次の災禍をもたらす。いったいどんな明日が待っているのか。



11月30日(金)準備

朝イチで極久里珈琲へ行き、珈琲とともにおいしいお菓子を頂く。「これが一番癒しの時間」と言う院生の言葉に大笑い。

その後、後発隊の院生チームと合流し、こむこむで準備をして、ビーンズふくしまの「みんなの家」を訪問した。福島からの避難者や帰還者の現状とビーンズふくしまの支援についてのお話を伺った。東北地方の面積は広く、対象者が広域に散らばっているという特徴があり、人口密度が高い地域に細分化した多くのサービス事業者がある都心部とは異なり、広範囲をカバーする事業展開をされていた。

夜、私は団さんを連れて極久里珈琲を再訪したが、その他のプロジェクトメンバーは、引き続きビーンズさんにお世話になり、「みんな de 食堂」に参加させて頂いた。たくさんのことを考え感じたことと思う。

12月1日(土)プログラム

福島市子どもの夢を育む施設こむこむにて、8年目を迎える「東日本・家族応援プロジェクト in 福島 2018」を開催した。漫画展、漫画トーク、クリスマスカレンダーを作ろう、東京おもちゃ美術館寄贈のおもちゃを使った遊びコーナー、おもちゃコンサルタントによる遊び講習会である。



毎年人気のクリスマスカレンダーには50名の参加者があった。8年目ともなると、震災の時にはまだ生まれていなかった子どもたちもいる。最初の頃に来てくれた子どもたちのなかには、もう成人している子どもたちもいるだろう。子どもたちの成長を見ていると、いろいろなことがあっても、時間は変わりなく前に進んでいるのだと感じる。院生たちも親子との交流を通じて、福島に思いを寄せ、今後の経過に関心を持ち続けてくれることと思う。





子どもたちが書いてくれるアンケートには、胸がキュンとなる。「楽しかったです。1日1日のおかしを食べるのが楽しみです。来年も来たいです。ハロウィーンのカレンダーもつくりたいです」(8歳女)、「すごくわかりやすくおしえてくれた」(8歳女)、「わたしはいろいろなかざりやモールがあつて、すごくかわいくかんせいしました。すごく楽しかったです。くふうしたりいろいろかんがえてわからないところは、お母さんにきいたりしたけど、すごくすごく楽しかったです。ありがとうございました♡(^)」(8歳女)、「家で休みがあれば、材料をあつめてまたやってみたいです」(8歳男) などなど。

親からもたくさんの声を頂いた。「子どもと一緒に作成できたので、とても楽しかった。家で何か作ろうとしても、こんなに大きな楽しめるものはなかなか作れないので、おもしろかった。お菓子をつけるアイデアはさすがですが、毎日楽しみです」(40代女)、「毎回、親子共々楽しく参加させて頂き、今年で3回目になります。来年は子ども皆連れて、また参加できたら嬉しく思います。来年もこのイベントがあること親子で楽しみにしています。」(30代女)、「材

料などたくさん用意して頂いていたので、子どもたちも楽しく満足できるものが作れました。とても素晴らしいイベントだと思いました。ありがとうございます。」(40代女)、「ていねいに教えて頂き、子どもたちがとても楽しそうだったので良かったです。ありがとうございました」(30代女)、「大阪、京都から来て頂いたと聞いて感動しました。また親子の絆も深まり、とても楽しませて頂きました。また来年も来れますように！」(30代女)・

おもちゃコンサルタント小磯厚子さんによる遊びの講習会もいつもながらに勉強になり、遊びコーナーの子どもたちとも楽しく遊ぶことができた。とくに、臨床心理を学ぶ院生たちには勉強になっているようだ。



漫画トークも毎年来て下さる方、初めての方、いろいろだが、世代に関わらず楽しく聞いて頂いたようだ。「いい年なのにあまりにもわからない事が多く、先生が何を言ってもはじめて聞く話だったり、この年になってもまだまだ知らない事があり、とてもいい勉強になり、来年もまた聞きに来たいと思います」(60代男)、「社会においては問題が必ず起きるため、問題自体を考えることよりも、問題解決を考えることが大切だということがわかった」(20代男)、「昨年も参加させて頂きました。お話を伺うと、とても納得し、勇気が出ます。何が正解なのではない。とても大切だと思います。また来年も是非うかがいたいと思いました。遠いところありがとうございました」(40代女)、「毎回、また考えさせられます。私のまわりも専門家の方々がどんどん増えていくけど、いつもお互いのうまくいかないことの指摘や、何してくれる?の話で終わっている気がします。今回のことを心に留めてやっていこうと思います」(50代女)。



こむこむの漫画展の前で、お孫さんを連れて男性と立ち話をしました。「善意であれ、甲状腺が多いと言われるのは迷惑。福島人はもう原発事故を忘れたのか、忘れるなと言うが、忘れられるはずがないではないか。忘れられるものなら忘れさせて欲しい。自分たちも孫とともにここに残ると決めて暮らしているのだ」と語られた。選択したものの、お孫さんのことを心配されていることが痛いほど伝わってきた。問題は、福島から遠く離れば離れるほど、簡単に忘れてしまえるという現実である。政府も多くのマスコミも、原発事故を終わった話にしようとしている。そうでなければ、原発輸出や再稼働はあり得ない。



12月2日(日)フィールドワーク

今年は、コミュニティバスをお借りし、NPO 法人福島地球市民発伝所（福伝）の竹内俊之さんと藤岡恵美子さんの案内で、飯館村から南相馬、そして浪江を回った。

紅葉した美しい山の景色のなかに、黒いフレコンバッグの山があった。線量計を借り、首にぶら下げて車に乗っていると、場所によっては線量が上がったり下がったりすることがよくわかる。街中でも、ちょっと山の方に寄ると急激に線量が上がるという体験を経て、たしかに除染され開けた場所は線量が減っていても、美しい光景に我を忘れてちょっと林や森に近づいてしまうと、もう危ないという日常を実感する。



飯館村の案内をしてもらえることになっている伊藤延由さんと道の駅で合流し、まずは役場へ向かう。役場の前には頭を撫でると村歌が流れるお地蔵さんがあり、その横に歌碑があった。伊藤さんは、歌碑の一節「土 よく肥えて 人情ある その名も飯館 わがふるさとよ 実りの稲田に陽は照りはえて・・・」と大きな声で読み上げ、

「飯館村には、豊かな自然という宝物があった」とおっしゃった。

学校や道の駅など、除染が進んだ所もあるが、フレコンバッグが積まれている付近や山中は放射線量が高く、完全に除染することは不可能である。それでも、飯館村では帰還者や移住者を増やそうと、子どもの教育費を無料にしたり家を建てる費用を補助したりしているそうだ。

多額の復興予算で建てられた道の駅やサッカーグラウンドなどもあるが、果たして村が維持していけるのか懸念されていた。山のすぐ近くにあるグラウンドでは、子どもたちがサッカーをしていた。





飯館村を見て回った後、きこりという村の施設で研修を受けた。最初に、福伝の竹内俊之さんが「福島の教訓と日本のジレンマ～原発災害から7年目の現実」のレクチャーをしてくださり、次に藤岡恵美子さんが聴き手となって、村民である伊藤延由さんのお話を伺った。

ほんの少しだけ語られた伊藤さんのライフストーリーは興味深く、そうやってたどり着いた飯館村への思いが、飯館に住んで放射線を測り、飯館に住むというのはどういうことか情報発信するという現在の活動に結びついていることがよく理解できた。

その後、ワークショップ「飯館村帰還ロールプレイ」を経験した。与えられた村民の役で、自分ならどうするか、その根拠とともにグループで話し合い、発表し合うというというものだ。

良いワークショップだった。放射能被害を受けた人々がさまざまな価値観と条件のもと、いずれにしても不本意な選択を強いられている現状に対し、自分自身の価値観を表現することは憚られるが、自分ならこう考える、自分ならこうするという形であれば、気兼ねなく表現することができる。

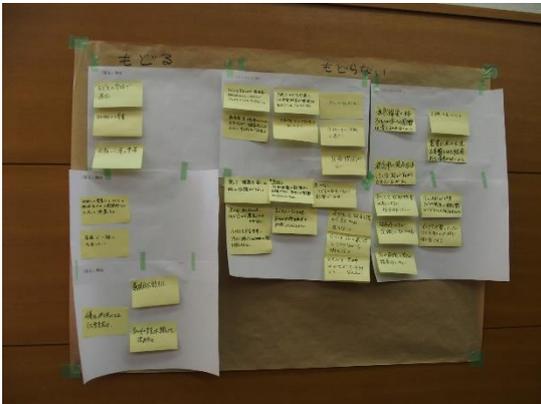
しかし、迷いのプロセスは同じでも、最終的な選択と決断は人によって違うものだと実感することが、辛い現実を突きつけた。ロールプレイとは言え、チームとして共に学び行動してきたメンバーがここから別の道を歩いて行くのだと思えたからだ。福島の人々は実際にそういった経験をしているのだ。





西の大学から勉強に来ました。飯館に行っていたんです」と答えると、「ああ、じゃあ、ごはん食べてる人たちもそれね」と言う。首からぶら下げている線量計が目立ったのかもしれない。いわきの浜の方から毎週 2 時間かけてドライブしてくるのだそうだ。

子犬は 3 日前に買ってきた豆柴の赤ちゃん。名前は「大樹 (ダイキ)」というそうで、ふと、津波でお孫を失くしたのだろうかなどと思ったりした。「それでは気をつけて」と互いに手を振って別れた。



飯館村を後にして、南相馬の道の駅で昼食をとった。噂の浪江焼そばを初めて食べる。たしかに B 級グルメというだけある。早く食べ終わったので、前の広場に出ると、かわいい子犬がいた。

飼い主らしき車椅子のおばあさんとおじさんに「かわいいですね～」と話しかけると、「どこからきたの？」と尋ねられる。「関





バスにて移動中、たくさんのフレコンバック、南相馬の防潮堤や、避難指示が解除されていない地域を見た。浪江町の請戸漁港に近づくと、津波の被害を受けてそのままになっている空っぽの家屋が数軒あった。請戸漁港は大きな防潮堤を建築中であり、だんだんと海がふさがれていくようだった。去年はそのままに海が見えていた。避難解除されてから、他の沿岸部と同じ道を追いかけているのだろう。

防潮堤の上に上がって海の空気を吸った。避難解除された途端、あっという間に見える景色が変わっていくのだと思った。漁港からは原発が見えた。

つづく